

2013年度（第15回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

女性学インスティテュートディレクター

米 田 眞 澄

本年度「女性学インスティテュート賞」に応募された論文は三本でした。選考委員の採点と委員会での議論の結果、最優秀賞には心理・行動科学科の卒業生、三宮愛さん（P09776）の「女性同（両）性愛者のコミュニティ参加は精神的健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか—面接法と質問紙調査法による検討—」が、優秀賞には、総合文化学科の卒業生、原田薫さん（I09321）の「〈男装の少女〉のセクシュアリティ—少女マンガ世界におけるジェンダー表象—」が、それぞれ選ばれました。総合文化学科の卒業生、仲谷友梨香さん（I09434）の「女性労働の推移と未来」は、惜しくも選外でした。まず、選考委員の講評と選考委員会での議論を踏まえた上で、三つの論文の紹介と講評をします。

三宮論文は、女性同（両）性愛者に対して面接および質問紙調査を行い、彼女たちのコミュニティ参加が精神的健康、自尊心にどのように関連するかを検討したものです。また、思春期における「性的指向」の確立、その後の「カミングアウト」についても考察が加えられています。方法論としては、面接法（研究1）と質問紙調査（研究2）の双方を用いて、質的、量的側面から検討されています。コミュニティ参加としては、大規模で単発的な「イベント」参加と、小規模で中長期的な「友人グループ」とのつながりが分析されています。

テーマおよび調査対象者が独創的であり、当該分野の研究手法に則った論述がなされていて、研究方法が緻密である点、先行研究への目配りがされており、文献研究に加えて調査・分析をしっかりとしている点、着実な理論展開がなされている点などが高く評価されました。

ただし、研究1の面接対象者が2名と少なく、いずれも20代前半であること、研究2の質問紙調査の対象が特定のパレード参加者であることから偏りがある

ことについて懸念が示されました。また、コミュニティ参加が自尊心を上昇させているとしていますが、自尊心が高い人がコミュニティに参加している可能性もあり、要因の因果関係の方向性が一方的であるとの意見や女性同(両)性愛者を対象にした研究から得られる知見を安易に男性同(両)性愛者にもあてはめることができるのかについて疑問とする意見も出されました。

しかし、学生論文としては、着眼点、調査の方法、結果の分析において優れていることから、論文を全文掲載する最優秀賞が妥当であるとされました。

原田論文は、少女マンガ(少女誌)において異性装(男装)を描いた作品のうち、50年代の『リボンの騎士』、70年代の『ベルサイユのばら』そして90年代の『少女革命ウテナ』の3作品を取り上げ、それぞれの作品において、男装の少女がどのように描かれているのかを考察することで、ジェンダー観、セクシュアリティの変化を明らかにしようとするものです。男装の少女の描かれ方については、以下の3点を考察しています。①主人公の外形的特徴(キャラクターの造形から見るジェンダー表象)、②他の登場人物との関係性(他者との関係性からみるジェンダー表象)、③男装の少女である主人公の「女性性」の描かれ方と他者との性関係(セクシュアリティ表象)です。

少女マンガの各場面を丁寧に考察し、そこに見られる「男装の少女」のセクシュアリティを抽出し、スムーズに論理展開がなされています。ただし、これらの作品はすでに先行研究で言及のある作品であることから、先行研究の引用が目立ち、研究および結論の独自性という点では高い評価を得られませんでした。3つの作品を順次、上記3点から考察するという展開となっていますが、3つの作品の間にどのような差異があるのか、それがどういう意義をもっているのかを自ら考察し、明確な結論を打ち出す必要があったというのが多くの委員の意見でした。

しかし、少女マンガの世界におけるジェンダー表象を、男装の少女という今日では確立されている一つのジャンルを取り上げて考察しようとした着眼点、先行研究に依拠している部分が多くはありますが、自分なりに3つの作品について丁寧に考察している点が高く評価されました。そこで、選考委員会では、

全文掲載とまではいきませんが、要旨掲載の優秀賞に値するとの結論に至りました。

仲谷論文は、雇用分野において男女の不平等を解消し、女性が社会でより幅広く活躍するために、働く女性自身に何ができるかを考察したものです。雇用の場に女性差別が存続していることはれっきとした事実であることを認めた上で、今から社会人となる筆者が男性中心の企業社会のなかで男性に負けないで活躍するために女性自身にできることは何かという問いから出発し、働く女性の心構え、問題への対処方法などについて考察しています。

身近なテーマを等身大の文章で綴っている点では学生らしさのある論文といえますが、全体的に印象批評や概説が目立ち、学問的水準に達するまでに多くの課題があるというのが選考委員会での一致した意見でした。

選考委員会では、心理学専攻の学生論文は、テーマ設定にオリジナリティが求められますが、考察方法についてはある程度のスタイルが確立されているところがあるため論文としての体裁が整えやすい点について考慮する必要があるとの意見が出され、多くの委員が賛同しました。今回、優秀賞となった原田論文は、確かに全文掲載とするには課題がありましたが、文学専攻の学生論文は、考察方法においても力量が試され、試行錯誤の末にたどり着くという過程を経ることも選考において考慮する必要があるとの意見が共有されました。また、学生懸賞論文は、女性学・ジェンダー論の視点をもった学問の追究を学生に奨励するものであるため、全文掲載に該当する最優秀賞を選ぶにあたって、その論文の学術的完成度を厳しく審査するというよりは、学生の学問的取組みを積極的に評価し、女性学・ジェンダー論への知的関心を伸ばすことを目的としていることが再確認されました。

女性学インスティテュートは、今後も、多くの学生に懸賞論文への投稿を呼びかけることで、女性学の発展に寄与してまいります。次回は、どのような学生論文が投稿されるのか、今から楽しみです。